おんどりが屋根の上で鳴くわけ

朝鮮半島

昔むかし、あるところに、若い木こりが母親とふたりで住んでいました。木こりは、毎日山へ行って、朝から晩まで木を切って、それを売って暮らしていました。

ある日のこと、木こりがいつものように山で木を切っていると、鹿が息を切らしてかけてきました。そして、

「鉄砲撃ちに追われています。どうか助けてください」と頼みました。

木こりはかわいそうに思って、鹿を薪の下にかくしてやりました。そして知らん顔をして仕事をしていました。

しばらくすると、むこうから、鉄砲撃ちが息を切らして走ってきました。そして木こりに、

「鹿がここを逃げていくのを見なかったか」とききました。木こりは、

「ああ、見たよ。むこうの道を逃げていった」といって、山道を指さしました。鉄砲撃ちは、走っていってしまいました。

そこで、木こりは、鹿を薪の下から出してやりました。鹿は、よろこんで何度もおじぎをしていいました。

「わたしは、この山の神です。きょうはせっかく遊びに出たのに、ひどい目にあいました。助けてくださったお礼をしたいので、何でもほしいものをいってください」

木こりは、しばらく考えて、

「べつにほしいものはありませんが、私にはまだ妻がいないので、美しい妻をください」といいました。すると鹿はいいました。

「では、いいことを教えましょう。この山をどこまでも登っていくと、大きな池があります。その池で、いま、仙女たちが天からおりてきて水浴びをしています。ぬいだ着物を池のそばに置いていますから、それを一枚取って、こっそり隠してしまいなさい。水浴びを終えて天に帰るとき、着物をなくした仙女だけは、飛べないので、天に帰れません。その仙女を家につれて帰って、妻にするといいでしょう。ただし、仙女の着物は隠しておいて、けっして見せてはいけません。着物を見つけたら、仙女はそれを着て、すぐに天に飛んでいくでしょう。そして、もし子どもが四人生まれたら、その時は着物を見せてもかまいません。三人までなら、ふたりは両腕にひとりずつ抱き、ひとりは股の間にはさんで逃げることができるけれど、四人だとどうしようもないからです。母親というのは、子どもをひとりでも残してはいかれないものです」

そういうと、鹿は山の中へ消えていきました。

木こりは、教えられたとおり、山をどこまでも登っていきました。すると、大きな池があって、美しい仙女たちが水浴びをしていました。池のまわりの大きい岩の上には、白い絹のように美しい着物がぬいでありました。木こりは、足音を立てないようにこっそり近づき、着物を一枚取りました。そして、岩のかげに隠れて見ていました。

やがて、仙女たちは水浴びを終えると、着物を着て飛びさりました。けれども、いち

ばん若い仙女だけは着物がありません。あわてて探しましたが、着物は見つかりませんでした。

木こりは、岩のかげから出て行って、

「着物は私が持っているよ」といいました。仙女は、

「ああ、どうか返してください。着物がなければ天に帰れません」と、一生懸命頼みました。木こりは、

「わたしの妻になってくれるなら、返してあげよう」といいました。仙女はしかたなく、木こりの妻になりました。

やがて、ふたりには子どもが三人生まれました。仙女はあの着物のことをひとこともいわず、木こりもとっくにわすれていました。

ある日のこと、仙女は、木こりに、

「わたしは、初め、天に帰りたくてならなかったんですけど、子どもが三人も生まれて、今では人間の世界が好きになりました。でも、私のあの着物はどうなったんでしょう。昔の思い出に、ひと目見てみたいのです」といいました。木こりは着物を出してやりました。仙女は着物を見るがはやいか、それを着て、ふたりの子どもを両腕にひとりずつ抱き、ひとりは股の間にはさんで、天井を破って飛びさりました。

木こりは、また前のように、ひとりで山に入って木を切り、ため息ばかりついていました。

すると、あの鹿があらわれていいました。

「そんなに嘆かないで。もういちど池に行ってみなさい。ひょうたんのひしゃくが、天から池の中に下りてきているでしょう。仙女たちは、前に着物を取られたので、もう池に下りてこないで、ひしゃくで水をくみ上げて天の上で水浴びをしているのです。水をいっぱい入れたひしゃくが天につり上げられるとき、その水をひっくり返してしまいなさい。そして、かわりにあなたがひしゃくに乗って天に上がりなさい。そうすれば、妻や子どもたちに会うことができます」

木こりはいわれたとおり池に行き、ひしゃくに乗って天に上がっていきました。天の上は何もかもが美しく、木こりがぼんやりながめていると、仙女たちが木こりを見つけて、

「あなたはだれ」とききました。木こりがわけを話すと、仙女たちは木こりを天の神さまのところへ連れていきました。すると、そこに、妻や子どもたちがいました。妻は天の神さまの娘だったのです。

木こりは、それから毎日、ごちそうを食べて、りっぱな服を着て、何の心配もなく暮らしました。

ある日のこと、木こりは、たったひとり残してきた母親のことが急に恋しくなって、どうしても家に帰ってみたくなりました。妻に話すと、妻は、

「もし地上にもどったら、二度とここへ帰ってこられないかもしれません」といって、木こりをとめました。けれども木こりは、

「かならずすぐにもどってくるから」と、一生懸命たのみました。
妻はしかたなく、
「では、天の馬を一頭あげますから、これに乗っていらっしゃい。またたく間に地上に着くでしょう。でも、もしひと足でも地面に下りたら、あなたは、永遠に天にもどれなくなります。どんなことがあっても、決して地面に下りてはいけません」といいました。
木こりは、天の馬に乗って、またたく間に母親の家に着きました。ふたりは喜んでいろいろな話をしました。
やがて、木こりが別れをつげると、母親は、
「おまえの好きなかぼちゃのおかゆがあるんだよ。一杯だけでも食べてお行き」といいました。木こりは、馬に乗ったまま、おかゆのいっぱい入ったどんぶりを受けとりました。ところが、どんぶりが熱くて、馬の背中に落としてしまいました。馬はびっくりして飛びあがりました。そのひょうしに、木こりは馬から落ちてしまいました。馬は、ひと声いなないて、空高く消えていきました。
木こりは二度と天にもどれませんでした。そして、毎日、天を見あげて泣きました。
やがて木こりは、年をとって死んでしまうと、そのたましいはおんどりになりました。だから、今でも、おんどりは、高い屋根の上にのぼって、天を見あげて鳴くのです。

村上郁再話

資料『朝鮮民譚集』孫晋泰著／勉誠出版